

温泉の高揚

日本の温泉文化は「保養」に端を発し、養生や旅の楽しみ、宴会にまで裾野を広げてきました。

保養とは、本来持っている自然の力を無理せず使い、気を養おうという日本流の考え方で、ヨーロッパの「治療の湯」とは微妙に違うものです。

現代の温泉にはたくさん魅力があり、人によって、求めるものも多様化していますが、やはり今でも「温泉に行こう」という計画は、気持ちをワクワクさせます。

これからの温泉は、ワクワクしながら使い続けることで、一元的でない多様な魅力を備え、地域と人、人と人を結ぶきっかけになるかもしれません。

訪れる人、観光客にとってのハレの温泉も、受け入れる人、地元にとってのケの温泉も、どちらも同じように大切なことではないでしょうか。

水の文化 22号 2006年2月

特集「温泉の高揚」

日本温泉文化史 神崎宣武

神奈川県温泉地学研究所

地下水としての温泉保全入門 菊川城司 板寺一洋

住民自らが地域性を再認識して生き残る

個性ある温泉地に 山村順次

農民の家 鳴子温泉に今も残る湯治の場 今野清十郎

ハッピーネスを基準とする維持可能な感幸 石森秀三

利用する側と管理する側の総有

野沢温泉村の湯仲間と野沢組

水の文化学習実践取材 長野県 野沢温泉村

地域の文化資源を伝える野沢組と道祖神祭り

みずだより 女将が守る温泉宿 野沢美季

文化をつくる 温泉の効用？

水の文化書誌 温泉 古賀邦雄

ミツカン水の文化交流フォーラム2005

インフォメーション

4 10 16 22 28 32 38 44 46 48 50 51